資料３

山里口御門の名称について

１）文献資料にみる山里口御門の名称について

１．本丸図　　山里口御門（松平文庫 1367「火事以前御本丸指図」）

２．本丸図　　埋御門（松平文庫 1362「御本丸御絵図　文政六年」）＜計画図＞

３．本丸図　　埋御門（松平文庫 1363「御本丸指図　文政十三年」）

４．本丸図　　埋御門（松平文庫 1365「御本丸御絵図　嘉永元年」）

５．本丸図　　埋御門（松平文庫 1364「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」）

６．本丸図　　埋御門（松平文庫 1372「越前福井御本丸御建物図」）＜文政 13 年計画図＞

７．本丸図　　埋御門（松平文庫 1371「御本丸御殿ノ図」）＜天保 6～14 年＞

８．本丸図　　山里口御門（松平文庫 1376（御本御建物図））＜火災前後？あるいは＞

９．城郭図　　天守臺下門（松平文庫 1336「御城下絵図」安永４年）

＜　＞は国京注記

10. 松平文庫 655「御門御櫓之部」

・文政 13 年の本丸住居における番所詰人数について「一右御門者御在国中御持筒組□□相勤候ニ付御城代組□□□　北不明御門弐人御天守臺下埋御門壱人水車御門壱人　右之通御在国中御番相勤候事」「三之丸南御門　同北御門　山里御門　清水御門」とあり

・「御櫓御多門其他御門預り并鍵」中に「（前略）一廊下橋御門　当番御城代組　二階一口　御作事方預り　御本丸仮柱　御矢場道具等入　但鍵同断（御城代預り）（中略）一水車御門　明切　一文政十三年より御本丸御住居中水車御門へ御番所出来　御在国御城代預り　御留守御持物頭預り　天保十四卯□四月廿九日御座所御住居相成候□御不用□御番所御取払　證認御城代方へ□□　一二之丸境御門明切　一山里奥御門　当番御在国御先組　御留守御留守組　但昼壱人夜壱人　但鍵御留守物頭預り一同所口御門　同　御先組　但し昼壱人夜壱人　一山里御門昼夜壱人番候処享保十五戌より昼壱人夜弐人ニ而　相定候事　此外三ノ丸二ヶ所御門清水御門同断　但鍵御先物頭預り（後略）

11. 松平文庫 665-5「命令之部　五」

「天保元寅年（中略）○当年御帰国以来御本丸御住居ニ付（中略）一北不明御門当番壱人ツヽ　一御天守台下御門当番壱人ツヽ（後略）」

12. 松平文庫 702「御城代勤務諸覚書（史料 701 号の写本）」

「覚　一瓦御門（中略）一北不明御門　海老五ツ鍵壱本二階西口錠鍵一口分□番　一廊下橋御門　錠四ツ鍵壱本番人　御城代組弐人　二階御や場道具入　錠鍵壱口分御城代方（中略）一水車御門昼夜明切　一二之丸境御門昼夜　右両所海老錠鍵御城代方　一山里奥御門海老四ツ鍵壱本御城代方　右番人御在国中御杉形組壱人錠鍵相渡ス　御在国之中御留守組壱人　但錠鍵不渡　一同所口御門海老貳ツ鍵壱本　右盤員音先手組壱人（後略）」

13. 松平文庫 797「寛文九年酉年大火之節類焼所附」

「山里御櫓　壱ツ（中略）山里小門　山里奥小門（中略）　山里亭壱ツ」

14. 松平文庫 798「御焼失後御普請出来場所」

「山里口御門升形并御寝間前西面石垣共」（問題の場所）あるいは「山里之内北之御門升形」（西二ノ丸北側の場所）とあり

15. 鈴木準道著　舟沢茂樹校訂『福井藩史事典』S52.11、歴史図書社、p22

「〇御城に属する総御門并預り　瓦御門　二階は御留守武具方預り、矢竹入　北不明御門　二階は火縄等入、御武具方　廊下橋御門　物品なし　山里口御門　御先足軽番　山里奥御門　御留守足軽番人（中略)」

16.『稿本福井市史上巻』　S48.1　歴史図書社、p167　後世（光通代より）の記録として

「北不明御門　無番　廊下橋御門　番人御城代足軽　以上二階御門十五　御唐門　御番城代足軽一御庭塀御門　御寝間堀（塀？）御門　御臺所脇廊下御門　上臺所開御門　中ノ口御門　山里口御門　番人御先足軽一人　山里奥御門　番人御留守足軽一人　御厩脇御門　番人御持足軽一人　御厩御門　七ツ蔵御門（後略)」

以上の本丸指図、城下絵図、文書から以下のことが言える。

１）当該櫓門の名称は「山里口御門」、「埋御門」、「(御）天守臺下（埋御）門」、「廊下橋御門」がある。

２）門名の使用時期は火災前後頃の江戸時代の前期頃に「山里口御門」と呼ばれ、江戸時代後期には「御天守臺下門」あるいは「廊下橋御門」とよばれていた。なお、江戸時代後期の本丸指図では「埋御門」とされていた。

２）冠木門の名称について

１松平文庫 1316「寛文９年福井城焼失の絵図」にみる冠木門の標記（寛文９年）

・焼失建物（門・櫓）焼損石垣を付箋で表示、記載箇所は武家屋敷地まで、

櫓、冠木、二階門の表示があり、付箋の二階門 10 ケ、冠木門 24 ケ、櫓 8 ケ、埋門 1 ケとなり、門の名称は二階門・冠木門・埋門の３種類である。二階門は櫓門であり、埋門は石垣内に埋められた門であるから、一般的に使用されている高麗門あるいはそれに類した形態の門（棟門・薬医門）を冠木門と称していたことが推定される。（本事例の廊下橋側の門が棟門、瓦御門の本城橋側の門が高麗門、北不明門の北側門が高麗門と、本丸指図にみえる柱配置から考えられる。）

２松平文庫 801「桜御門御普請御作事方諸事留」にみる門標記（寛政３年～４年）

「一同廿日冠御門下柱居石御作事方御用不用ニ付申談御普請方へ請取り石垣之内へ仕リ用　大御門下柱居石も閏二月同様ニ付追々請取リ置」とあるように　冠御門と大御門となる。桜御門は「福井城郭各御門其他見取絵」（あるいは福井城旧景）によれば、正面が高麗門でその背後に櫓門が建てられていたことがわかるから、冠御門とは高麗門を、大御門とは櫓門をさしていることがわかる。

なお、発掘成果と石垣に残る痕跡から櫓門西側の枡形にある小門は棟門であることが想定されたので、今後は棟門と呼称する。